

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イオン・ドラグミス「サモトラキ」(五) 第九章
Author(s)	福田, 耕佑
Citation	プロピレア, 27 : 132 - 126
Issue Date	2021-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051915">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051915</a>
Right	Copyright (c) 2021 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



## イオン・ドラグミス「サモトラキ」(五)

福田 耕佑 訳

京都大学文学研究科博士課程後期  
アリストテレオ大学哲学部中世・近現代ギリシア学科

### 第九章…サモトラキ人ファルデイス

——いいですか、私は品の無い男などではなく、学がある方なんです。

ファルデイスの手記

ファルデイスとはプラトンということだ。これら二つの名詞は同じ意味を有している。無論そこに類比を見出すことのできる者がいればの話だが、私にはたまたま同じ思考

を象徴しているようなものに見える。

ファルデイスは奴隷の出で、サモトラキ人としてサモトラキに生まれた。だが状況の運びでスミルナである商人のもとに働きに行くことになった。そこでいくらか物を書くことを学んで世間を知り、後にマルセイユに行くことになった。その時はコレラ患者を乗せた船で当地に上陸し、その地にコレラをもたらすこととなった。幾分実践的に医学を学んでいたファルデイスはこの病気についても研究することとなった。後には生活の困窮により、コルシカでマニの植民地になっていたカリエスで教師をしに赴くことを余儀なくされた。二年後、この植民地に関して冊子を一冊書いた後、マルセイユに戻ってそこから故郷のサモトラキに帰還した。そこでは医学や歴史、そして文献学の本を読んだり論文や研究書を書いたりしながら教師や医者としても少々働き、そして島のことにも関わっていった。

ファルデイスの瑞々しくて何にでも首を突っ込みたがるような性格は、偉大な頭脳を有する者か子供だけが有する類のものだ。大学で医学と島の昔のことを勉強し、発掘に來た外国人考古学者たちを案内したり、学んだり見たりしたものを論文にしたり、同郷人を教育しギリシア語の書き方を教えてやろうとしたりし——ラテン文字で音だけ

の正書法を作り上げようとしていたのだ——、小冊子を用いて強勢記号と氣息記号を廃止した。書き物において宗教的に東方教会の解放者としてのルターになろうと思い、島の歌を集たり風刺詩と韻文で短編を書いたりしていた。彼は言語以外の観点でも全てにおいて教養のある人物であった。だが共同体においても、とりわけ敷医者のアルメニア人がやって来て居を構えた時、外国の考古学者や文献学者、そして植物学者がやって来た時、果ては地震が起きてホラの家々が壊れてギリシアから援助物資とどのような地震が起こったのかを見に来た大学教授を積んだ軍艦がやって来た時には、機転を効かせたものだった。

ほぼ野蛮人で大体が奴隷だった者たちが住んでいる島の中からも、何らかの理由で一人は傑出した人物が現れ、他の人々よりも広範な関心を有しより抽象的に物を考えるものだ。島の研究を通して島民たちの生活と島の存在、そして歴史を確かに書き留めて残してくれた。彼が自身の生涯と島民たちの生涯を意識して同郷人にはどうでもよかつた物事や事件に敏感でいてくれたことで、頭一つ抜けた存在となりその土地の要となった。自分の中で島の意識というものを形作っていくことで島をも形作っていったのだ。そしてそこで——もし彼が他の人々よりも抽象的に

物を考えていなかったとしたら——人生という短い期間の中で島を通りがかる五、六人の外国人たちと自民族の数人の知識人たちに見つかるだけで日の目を見ずに過ごしたかもしれない。だが、島に関する一連の観察を彼らに残すことができたまさにその故に、彼らによつて日の目を見ることになったのだ。

サモトラキも十九世紀には人口がますます少なくなつてはいつたが、他の人々に傑出する人物を輩出しもした。島の人々は多くの細胞の一つのようなもので似たり寄つたりであり、生きる者もいれば死ぬ者もあり、また産み出す者もいた。生気に溢れた細胞というものは死んだ細胞から命を受け取つて、その地位と遺産を引き継ぐものである。だがこれらの細胞はあまりに互いに似ているので、誰が誰だか区別できず、自分たちが幾ばくも別々の存在だということ記憶に留められない。大多数の中から誰かが出て来る。他のあらゆる人々の遺産の存在と重みを感じ取る、これらの人々の代表のような、より強く同時により弱い者、より賢くより感受性の豊かな者。これがファルデイスだったのだ。

おそらく、父から金を受け取つていたり自分で金を稼いでいたりしたのであれば、島を出て移住して島を見ること

もなかっただろう。自分がわずかでも周囲の人々と異なると感じてしまうような人々は、自分が極めて変わった人物だと思い失望を覚えて意固地になってしまうので、もはや地元の掟や習慣は彼らにとつて適するようなものではなく、他の人々のような義務を負おうとは思わないであらゆる支配から逃げ出して根無し草になり、天使たちと、つまり自分に似ている人々と交わりに行こうと欲するものなのだ。人には荒野において一人で生きる特別な力が必要なので、異質な人々の大部分は自分たちで固まって生きることにさえ適さないのである。全ての人間は似たようなものであつて例外的な人間というのは孤立した者であるが故に、このような例外的な人々を見出し得ないことを知っているのだ、群衆の中にあつて同じような人々を見出そうとはしないのだ。

もしフアルデイスに金があつたならば、島を去つて十九世紀のギリシア民族を養うことになる医者か教授になるというべきか、医者や教授で終わつてしまつていたように私には思われるので、彼に金がなくてよかつたと思う。というのも、彼が当時の同業者たちに優越していたように思えないからだ。今やサモトラキ人として留まることで他の人々からは卓越した存在でいられるのだから、私は彼の

死後にその地で数年を過ごしたが故に彼を知ることになり、大洪水の時以来の死者と生者を含めたあらゆるサモトラキ人たちが同時に語るのと同じほどを、彼が一人で語つてくれるのだ。

私は、島民たちが誇りをもつて亡くなつた同郷人の名前を口にし、フアルデイスが島民たちに言つたことを繰り返して驚嘆した様子で彼の島の家の小さな図書館について語つてくれたのを気に入っている。島中であれほどたくさんの本が集められた家は他になかったが、全部で三百冊には達しなかつた。もし書いたのが氣息記号や強勢記号に関する小冊子や論文だけだつたのなら、この教養ある同郷人に対する素朴な島民たちの、無知の混ざり合つた高慢さを好きになることはなかつただろう。だがフアルデイスは自分の島と——そこに生きざるを得なかつたのでおそらくは偶然的の産物なのだろうが——最初の洪水、パリアポリの考古物やカヴィリたち、そしてかの時代あの馴染みの小高い場所にホラを建てたビザンツ人やジェノヴァ人、一四六二年にこの島を征服したトルコ人、一八二一年の大惨事に、——自分の故郷のあらゆる生について関心を抱いた。そういう理由でこの島から始めてあらゆる民族に関心を持つようになつた。そのため私には、彼の記憶が私を助け、私

がこの場所をより見知らぬものとして感じるだろうという予感がしたが故に彼のことを驚嘆するサモトラキ人たちが素晴らしいものに思えるのだ。もしファルデイスの記憶がサモトラキに残っていなかったとしたら、おそらく私はこんなにも明白に島に関してもまた私たちの民族に関しても考えることはなかっただろう。同郷人たちがあまりに無邪気に彼に認めていた優越性も引き下げられることはなかった。ギリシアの【*τῆς Πολιτικῆς*】子供たちに多くの怠惰と父祖伝来の術学性を贈った何千万の頂点に立つ医者、教師そして弁護士の人でしかなかったとしたら、島民たちの誇りが私を感動させることはなかっただろう。

だが、おせっかいに多くの問題に関わる代わりに矛先を絞り、サモトラキ島に向かい合う全てのギリシア人【*Πολίτης*】の頭の中にただちに去来するようなサモトラキに関する本を書いたのだから、ファルデイスはあらゆる人々にとつて有用な人物だっただろうと私には思われる。だが自身の論理性が深くまで自分自身を分析させはしなかった。とりもなおさず強勢記号と氣息記号は廃止されねばならなかった。教養ある人物だったのだ。あらゆることを話さないでいられただろうか？

しばしば思考する人間の理性は大いに論理性から逸脱

してしまうものである。ファルデイスの理性も多くの点で脱線したかどうかは、その時偶然有している目や自分がいて目になっている立場に依じていかようにでも取れる問題である。

私は、自分の境界の内側、自分で見つけた場所に座って我が島から世間を眺めているが、皆が論理を神として崇めているのでどうも私はファルデイスが気に入らない。プラトンは書き物においては芸術家だが、各々の人間の論理力に依じた多くの論理（つまり個人の性分というやつだが）というものがあるにはあっても論理というものが存在しないが故に、許してやろうと思う。ある科学の中に含まれる現象の円環に依じて科学者がたくさん出て来るには出てくるのだが、科学そのものというものが存在しないようにね。各々の人間や各々の人種、或いは各々の文化の日々の使用（つまり日々の必要）にとつての無限で色取り取りの真実があるだけで、唯一の真実というものがないように。ギリシア人たちは本当に最初は強勢記号と氣息記号を使わずに書いていたのだが、世間様の言うところでは古代のアリストタルホスなる人物がサモトラキ人で、強勢記号と氣息記号を用いてギリシア語を飾ろうと考えた初めの人物だというのをファルデイスは聞き及んだ。彼は論理的な

人物であり心の中でこのように思っていた。——アリストルホスはサモトラキ人でギリシア語に強勢記号と氣息記号を付けたのだったな。私だってサモトラキ人であり、では私がギリシア語から強勢記号と氣息記号を取り除いてやろうじゃないか。あのアリストルホスが文法学者なら、私は識者のファルデイスだ。なぜ強勢記号と氣息記号が必要なのだ。アリストルホスより前のギリシア人たちはあのようなのは書いてなかったし、かの時代のギリシア人たちはヨーロッパと全世界が驚嘆しているギリシア人じゃないか。一体私たちがかの時代のギリシア人に似ていたくないなどと思うわけがないだろう？私の後ではギリシア人たちも強勢記号も氣息記号も無しに書くようになるのではないだろうか。こうすれば私たちは先祖に相応しい存在になれるだろう。子孫たちも強勢記号を初めて置いたのがサモトラキ人で、また強勢記号を初めて廃したのもサモトラキ人だと言ってくれることだろう。

よい種を受け入れる用意のできている大地のように、この思考はファルデイスの頭に植え付けられ、芽が出て生い茂り、夢となって木となり、そして最後の業績となった。歴史と論理の力というのはかくも力強いのだ。ファルデイスの起源と彼の論理性が『強勢記号も氣息記号もない筆記』

という冊子を産み出したのだった。

このサモトラキ人は本腰を据えた。本を開いて読み、後に論文や冊子を執筆して情熱的に強勢記号と氣息記号と戦った。そして、彼のことを揶揄する新聞があったり彼の書いたものの故に攻撃する者がいたりすれば、彼はキリスト教と真理の殉教者であるかのように応答し、書簡を書いて論文を敢行したりしたが生活は大荒れに荒れた。彼も「真理のために」働いたのだ。これは彼個人の性分に負うところが大きくかつこれに相応しい物だった。彼の持ち家が揺さぶられるほどに揺れに揺れた地震の調査のためにアテネからサモトラキにやって来た教授の語るところでは、強勢記号と氣息記号のない文章が習慣で崇高なものとなっていたので、ファルデイスは毎日彼の元に強勢と氣息記号無しに書かれた地震に関する観察のメモを送っていたそうだ。人生の状況がどれほど変わったとしても、彼の理論を忘れることができなかったようだ。だが、これらの状況にあっても心を乱すことなく文章を書き、観察をしてメモを残していく力を有した人物であって、大地震の中でも収集物を遺失することがなかったのだ、たとえ彼の論理が出した理論も絶えず正しくて不動で不死でもなければ永遠で不滅の構成物でもなかったとしたとしても、彼の

頭は聖なるものであったと言っても差し支えないだろう。島に留まり熱狂的に強勢記号と氣息記号と戦つたある島民の独り相撲にかけた情熱を推し量るにせよ、しぶしぶではあるが、彼の論理が私にプラトンの対話編を思い起させるように、ソクラテスの「毒人参」を思い出させるこの人物の意固地を称賛しよう。

ファルデイスはプラトンと同じ民族であり同じ本質を有しているのだ。彼が強勢記号と氣息記号に氣を取られていてよかつた。さもなければ、抑制の効かない不屈の論理でもつてもっと本質的な物事を厳密な体系の中に埋め込もうと戦つていたことだろう。無駄骨に終わったことだろうが。私は彼の『トルコ人の支配下にいるギリシア人たちの宗教と民族性』という手記を見たが、そこではヒオス島人のコライスが言つていたようにギリシア民族が救われるのは文芸(つまり「光の拡張」)によつてであつて軍隊と武器と革命は必要ではなく、あの蜂起の英雄たちがどれほど称賛に値する人々であつたとしても一八二一年の革命は余計であつたのだと書かれている。そして一四五三年の後ヴィサリオン<sup>三</sup>も民族を救う文芸に関してこのように語つていたので!

プラトンでさえも論理が民族の自己保存という感覺の

ような最も力強く真実な感覺に疑いをまき散らしたわけが、論理と屁理屈でもつて戦争のような人生の中で最も有用で健全であつて真つ赤な物に毒を盛ろうとしている時には、論理は役に立たず無用であり卑俗で冗談のようなものにすぎず、私はこんなものは踏みつけてやろうと思つた。

対話篇は喜ばしい技術であるが、没落を喫して以来のギリシア人たちに好まれすぎたが故に、私は大嫌いだ。対話篇はコレラよりも劣悪で病的であるが、ファルデイスはこの研究を続け、これと戦つた。弁論術は病的で聖人たちの骨の中に入り込んでこれを腐らせていくのだ。この症例は深刻で言葉数の多いものだ。そして、彼らが結核にかかつた骨の入つた袋のように生きてはいるがその中が腐つてゐるのに、武器を持つて戦う直立の敵に立ち向かう時には、座つて言葉を発したり言葉を出そうと立ち上がったりののだ。彼らにとつて弁論術は美しく簡単で、面倒なものではあるがその他の何物でもない。

人が誰かの完全性について批評している時に文芸が問題になることはない。無論大抵の場合人間理論を作りあげていくが故に人間性を毀損するものである。人間というのは理論的な存在ではなく、他の異なる種類の動物である。人間は動いて考える何かであり、ただ考えるだけのもの

はないのだ。そして、思想が拡張し膨張していくが故に、活動と更には単純な動きさえをも押しつぶして圧迫してしまう時には、人間はゆがめられて化け物になるのだ。歩くことを忘れた者は、もはや人間ではないのだ。

ファルデイス氏よ。文芸によってではなくむしろ闘争によって民族は救われることだろう。

なぜなら、こうすることによって平素文人たちが民族を養っている麻葉から目覚めさせてやり、彼らが自分の足で立つて歩き回り、必要に応じて相手を打つことができるようになるからである。美しかろうが醜かろうが組み上げられた理論や、借りてきたものにせよ自前のものにせよ論理体系においてある民族や人間の自己保存と勝利の不可欠という感情を圧迫するような真似はやめようではないか。というのも、これらの感情こそが人間を自由に生き生きとさせしめ、完成へと導いているからである。人間を創り出すのは闘争である。そして諸民族が目的としているのは闘争である。奴隷はただ闘争を通じてのみ自由を得るのだ。そして闘争が各々に対しこれだけがどれほど理論的にも適したものであるのかを示すことだろう。

— Τὸν Ἀποστόλιν (一八七八—一九二〇) : 外交官、政治家、ギリシアの民族主義的作家。父親は首相経験のあるステファノス・ドラグミス。パレスやニーチエの思想に影響を受ける。著作に『ギリシア文化』、『私のヘレニズムとギリシア』。

— 底本に Ἀποστόλιν Ἰών (1994), *Στοιχάκιτι, Το νησί, Εκδόσεις ΒΑΣ. ΠΗΤΡΟΠΟΥΛΟΥ, Θεσσαλονίκη*, を使用している。

— Βιογραφίαν ο Ἰουλιανῶντος (Βιογραφίαν ο πατριάρχου): コンスタンディヌポリでゲミストス・ブリトンに支持した人文主義者。コンスタンディヌポリ陥落後はイタリアに亡命し、ギリシア語の写本を組織的に収集して保存するとともに、西欧にギリシア語の文献をもたらしたことで知られている。